



## 7 景雲餘彩

一帖

横山大観ほか二十二名の合作  
大正十一年（一九二二）

絹本着色

本紙各三二・〇×三九・〇

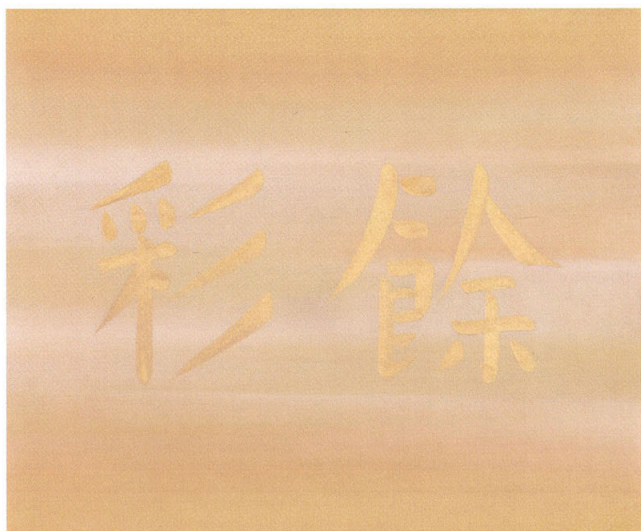
総三六・一×四三・一×二二・〇

本画帖は、大正十一年の第九回再興院展へ初めて皇太子・昭和天皇が行啓されたことを記念し、日本美術院が制作、献上したものである。画帖は巻頭の二面に横山大観が「景雲」「餘彩」の題字を記し、それに続けて大観を含め、下村観山、前田青邨、小林古径、速水御舟、安田靉彦といった院を代表する画家たち二十二名が、小画面にふさわしい洒脱で趣のある絵を描いている。巻末には、やはり大観が題字と同様の金泥を薄く刷いた地に奥書を記している。画帖の表紙は、萌葱地に瑞花瑞鳥を表した金襴の中央に、大観の筆で「景雲餘彩」と墨書された金地の題箋が貼られる。

日本美術院は、明治三十一年に東京美術学校を辞職した岡倉天心が中心となって設立した美術団体である。同三十九年には茨城県五浦に移転し、その後解散状態になるが、天心の死を契機に、大観、観山が文展へ対抗する在野団体という性格を強めて大正三年に再興させた。同院は、皇太子の展覧会への行啓を切望し、大正十年の第八回院展の時には東宮大夫へ行啓を願い出た。これは皇太子が欧州ご訪問からの帰朝直後で多忙を極めていたため叶わなかった。しかし翌年の日本美術院創立二十五周年を記念して行われた第九回展に際しては、あらためて東宮御所に公式の願書と共に記念の画帖を献上したい旨を申し入れた。この願いが認められ、ついに大正十一年九月、皇太子の行啓が実現したのである。行啓当日に展覧会会場で画帖は献上され、「ただちに一葉ずつ繰りひろげて御覧遊ばされ、御満足に思召さるる旨の御沙汰あり、御嘉納遊ばされた」（斎藤隆三「日本美術院史」、中央公論美術出版、昭和四十九年）という。

画帖には画題と作者を記した目録が付属していたと想定されるが、現在これは失われているため、当館では同院が献上を記念して作製した同名の図録によって画題を記している。





② 横山大観 題字



① 横山大観 題字



③ 横山大観 霊峰



⑥ 山村耕花 生果

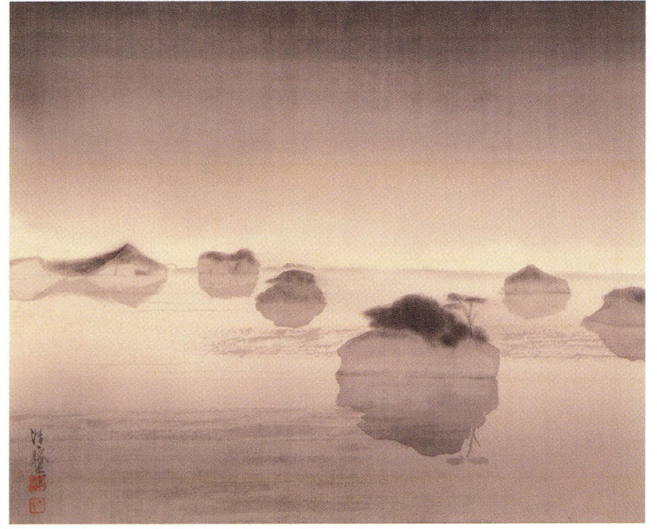


⑤ 荒井寛方 鳩





⑧ 小林古径 栗鼠



⑦ 近藤浩一路 松島



⑩ 小茂田青樹 山村秋色



⑨ 富田溪仙 小原女

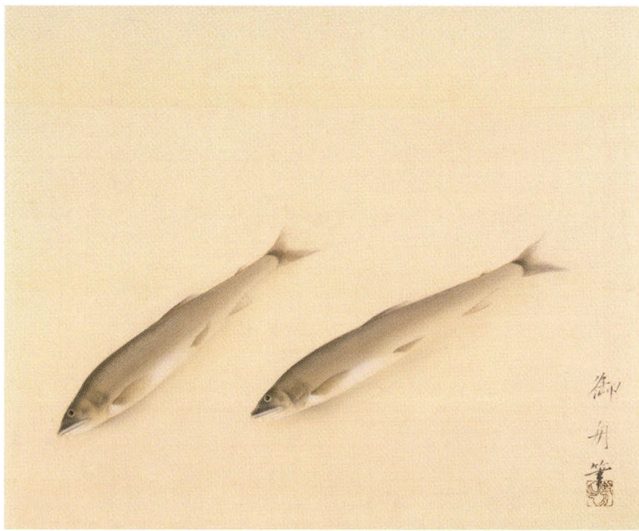


⑫ 木村武山 養老

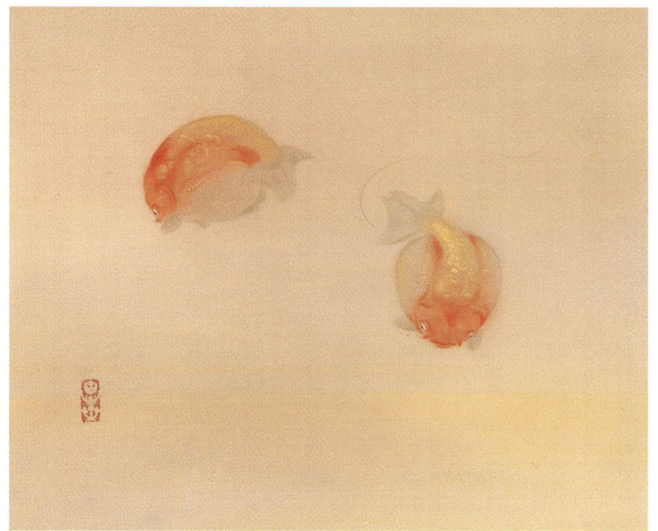


⑪ 橋本静水 芙蓉





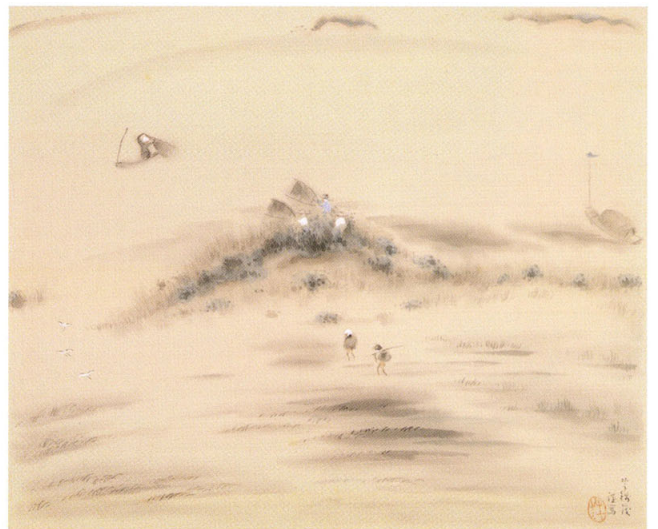
⑭ 速水御舟 香魚



⑬ 橋本永邦 蘭鯉



⑯ 北野恒富 椿



⑮ 小川芋銭 細鰻魚



⑰ 大智勝観 満山紅葉

⑱ 真道黎明 葡萄



⑳ 中村岳陵 鯨



㉒ 川端龍子 いちぢく



㉔ 下村観山 残雪

㉑ 安田靉彦 良寛



㉑ 筆谷等観 晩帰



㉓ 長野草風 ジャンク

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

ひろげる、たのしむ、小粋な日本画——近代画帖の美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 55

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十三年七月二十三日発行

© 2011, The Museum of the Imperial Collections